

編集後記

第114回日本医史学会・第41回日本歯科医史学会合同総会・学術大会が西巻明彦会長のもとで5月11・12日、日本歯科大学生命歯学部にて開催され、18題の誌上発表を含む119題の演題が発表された。また大会長講演、市民公開講座3題を含む4題の特別講演には大会長と実行委員の方々のお力で、協賛学会である日本薬史学会、日本獣医史学会、日本看護史学会の会員にも楽しんでいただける講演を準備していただいたことに感謝します。参加された方には東京の Powersポット東京大神宮のすぐそばで、研究のパワーをいただいて帰られた2日間であったとおもいます。

この総会で承認を受け、今号から編集委員が大幅に変わることになりました。坂井編集委員長の理事会報告にあるように日本医史学雑誌の改革が一段落したことや、今後の学会発展のために編集委員経験者を増やしたいとの意向で、新委員として天野陽介、逢見憲一、永島剛、松村紀明、渡部幹夫が加わりました。前号まで、ながい間編集委員を務めていただいた委員に感謝して、会員の投稿をもとに、本雑誌の‘敬すべき’風格を守りながら‘遠ざくる’ことのないものをお届けするように努めたいと思います。向後、論文の査読は2名の会員にお願いする方針になりました。査読に当たられる方々のご協力をお願いします。

過日、プリンストン大学の東洋史図書館を訪ねたときに、開架の雑誌の書架にある日本医史学雑誌を手にした時の本雑誌の重さを思い出します。歴史学を大事にしないで学術は成り立たないと思いますが、その媒体としての印刷メディアは雑誌・書物のデジタル化により大きな変革期にあります。歴史の研究者としては好都合なことも、不都合なこともあります。そこから離れて存在することは難しい時代になっています。本雑誌のデジタル化も理事会では懸案となっているようです。歴史研究における研究は文書によるところが多いと思いますが、物が語る歴史もあると考えます。

編集後記に追記の形で紹介いたします。先日、結核予防会のTBアーカイブ委員の方々と、印西市立医科器械資料館（日本医科器械資料保存協会運営）を訪問し、人工気胸器などの展示物を拝見してまいりました。同資料館には表面がぼろぼろになった研究初期の人工心臓が保存されており、日本においても人工心臓を装着して心臓移植を待機している方が多数いる現在を考えると、保存された器物から歴史学研究的インスピレーションがわくことも多いだろうと考えて帰りました。3Dプリンターが実現し、「ものづくり」も大きく変わる可能性のある現在の科学技術の中で、医史学が占める位置は決して狭いものではないことを実感しました。会員諸氏の研究の一助となることを期待して、ほかの医学資料の保存されている資料館や博物館の訪問もお勧めします。

(渡部 幹夫)